

北海学園大学
日本語教員
養成課程

『報告書』第5号

北海学園大学
2019年3月

目 次

1. 「日本語パートナーズ」派遣プログラムに関して	中川かず子	2
2. 学生への調査から見る言語変化	徳永 良次	4
3. 日本語教育に関する卒業論文紹介 「外国人技能実習生に向けた日本語教科書案の作成」	菅 泰雄	8
4. 「大学連携日本語パートナーズプログラム」に参加して ～雲南師範大学での経験から～	齊藤 しほ	14
5. ブラウイジャヤ大学と日本、日本語教育、 そして、日本との交流	小川ゆう紀	16
6. 英国カーディフ大学での日本語教育実習	小里美津希	18
7. 英国カーディフ大学での4週間の日本語教育研修体験から	小林 美咲	20
8. 英国カーディフ大学での日本語教育研修	齋藤 七菜	22
9. 日本語ボランティア「たんぽぽ」での実習を終えて	岩倉 玲	24
10. 日本語ボランティア「たんぽぽ」の実習授業について	木下 詩織	26
11. ブルガリアの日本語教育現場から	岡田 佳子	28
12. ロシア ヴラヂーミルへの短期留学の経験から	中村 遥	30
13. 介護分野の技能実習生に対する日本語教育を経験して	守岡みのり 田澤あす美	32

「日本語パートナーズ」派遣プログラムで アジアの日本語学習者との交流を ～日本語教育支援を通じてアジアとの架け橋に～

人文学部教授 中川かず子

国際交流基金が募集する「日本語パートナーズ」プログラムをご存知だろうか。近年、本学でも一般学生や社会人学生の間で個人資格で応募する人達が増えて来たようだ。日本語教師の資格は問われないため、人文学部だけでなく、経済、法学部ほかの学生に浸透してきている。

この「日本語パートナーズ」は、2013年の日本・ASEAN 特別首脳会議において日本政府が発表した新しいアジア文化交流政策「文化のWA（和・環・輪）プロジェクト～知り合うアジア」の事業の一つである。同事業の実施機関として翌年4月に国際交流基金アジアセンターが設立され、この企画の実施が開始された。コンセプトとしては、芸術・文化の双方向交流と日本語学習支援ということである。2014年には日本語学習者数の多い、インドネシア、タイ、マレーシア、ベトナム、フィリピンの5か国へ100人が派遣されたのを皮切りに、年々徐々に派遣人数が増え、2017年には12か国・地域（インドネシア、タイ、マレーシア、ベトナム、フィリピン、ミャンマー、シンガポール、カンボジア、ラオス、ブルネイ、台湾、中国）にまで派遣地域が広がり1,000人以上が派遣されるに至った。国際交流基金によると、2020年までに3,000人の日本語パートナーズを派遣することを目指しているようで、アジアと日本との相互交流の推進を目標に事業が進められている。

国際交流基金アジアセンターの話からは、日本の高校生、大学生の「内向き」志向を「外向き」に転換できるよう政府が支援して海外との人的交流を推進したい方針も見える。特に、アジア諸国の日本語学習者との交流を通じて日本人の若者が積極的にコミュニケーションを図り、自ら自律的にアジアの社会、文化を学ぼうとする態度を身に付けることも期待されていると思われる。一方で、募集要項などを読むと、パートナーズの活動内容の中で「日本語教育」に関する活動がやはり主要なものと感じ取れる。例えば、現地日本語教師が行う授業への協力、教材作成への協力、現地学生との日本語会話パートナー、このほか、派遣先の国際交流基金海外拠点等が実施する日本語教育事業への協力など、いずれも日本語教育に全く関心がない人達には向いていない活動のようでもある。

本学では、2014年に国際交流基金海外日本語教育インターン派遣プログラムにより、協定校であるカナダ・レスブリッジ大学に大学院文学研究科修士課程2年の院生を約10か月派遣した実績がある。その翌年も同じプログラムにより同課程2年に在籍する院生が同じカナダの大学に派遣された。インターンの活躍が現地で評価され、2016年にも同大学からインターンの受入れ希望が出されたものの、大学院生の中から派遣候補者を挙げるができなかったため、派遣を断念した経

緯がある。

しかし、2017 年秋に国際交流基金の「海外における日本語教育」プログラムが翌年から「アジア文化交流強化」プログラムに含まれるようになり、ASEAN 諸国、及び中国・台湾へと派遣先の国や地域が限定されるようになった。しかも、派遣先は協定校に限らず、教授の個人的つながりも認められている。そこで、本学日本語教員養成課程では、2017 年 12 月に「大学連携日本語パートナーズ」派遣プログラムに中国雲南師範大学にインターンを派遣する申請を行なうことにした。その結果、翌年 4 月に同大学にインターンとして人文学部生 1 名（英米文化 3 年、齊藤しほさん）を 8 か月派遣することが正式に認められた。学部学生に長期にわたり、海外で日本語教育インターンを経験してもらうのは、今回が初めてであったが、国際交流基金による経済的な支援があったからこそ可能になったと思われる。雲南師範大学に派遣された学生は間もなく任期を終えて帰国する予定である。本報告書に齊藤さんの体験記が掲載されているので、読んでいただきたい。

2019 年度の派遣については、4 月末に決定される見込みであるが、申請が認められれば、インドネシア・マラン市にある国立ブラウイジャヤ大学に 8 月下旬から 9 月上旬までの二週間、学生 10 名を派遣し、日本語及び日本文化の交流プログラムに参加してもらう予定である。申請が採択された場合、本学では日本語教員養成課程履修者に応募を呼びかけ、応募者多数の場合は選考により派遣学生を決定する。このブラウイジャヤ大学には本学人文学部及び文学研究科を修了した小川ゆう紀さんが日本語教師として活躍している。小川さんにも大学紹介を兼ねてインドネシアの日本語教育事情について本号で報告していただいている。

「日本語パートナーズ」事業は、上で述べたように 2013 年にアジア文化交流政策の一環で打ち出され、2014 年に国際交流基金アジアセンターが設立されてから実施に移された。

同アジアセンターの HP によると、「今後、東京オリンピック・パラリンピックが開催される 2020 年に向けて、音楽、演劇、映画やスポーツから日本語教育、学術まで、様々な分野で事業を実施しながら、アジアの人々の交流活動を応援する」という説明がある。日本語教育支援は同事業の中核を担うものと見られるが、2020 年という期限があること、派遣人数が日本語学習者数により決定されるため、学習者数の少ない国への派遣人数が少ないことなどの条件もある。それでも、日本人が東南アジアについてより理解を深め、現地の人々との交流により彼らの日本理解が少しずつでも広がりを見せることができれば、この事業は目的を果たすことになると思われる。特に、日本の若者達が海外に出て、日本人として誇りを持ち、自分たちの言語と文化を現地の人々に楽しく伝えることができればと願っている。学生達には特に奮起して応募してもらいたいし、できるだけ多くの若者が「日本語パートナーズ」事業を活用して海外の日本語支援活動に参加してくれることを望みたい。それはきっと自分の成長にもつながるはずであるから…。

学生への調査から見る言語変化

—変わるものと変わらないもの—

人文学部教授 徳永 良次

はじめに

日本文化学科の1年生が取れる数少ない専門科目に「日本語学概論」がある。ここ数年（あるいはもっとそれ以上）継続して取り組んでいる調査がある。講義では、音声音韻や、方言といった分野を教える際に、出席代わりに言語調査を実施して、そのデータを意欲のある学生数名に立候補してもらって、集計・補足調査・資料作りなどをして結果を発表する、ということを行っている。

ここでは、その中から筆者が興味深いと感じた項目を2点取り上げてみたい。

1 コンビニの呼称 「セブン」か「イレブン」か

1974年に日本に上陸した「セブンイレブン」は、早くも翌1975年には北海道上陸をはたし、札幌市北33条店、二日後には「札幌市豊平旭町店（現在は閉店）」をオープンさせるなど瞬く間に広まっていき、現在では日本最大のコンビニである。

筆者が「セブンイレブン」を知ったのは1980年代の関東地方においてであるが、その後、家族、知人のあいだで比較的早く「セブンイレブン」は「セブン」と略称されるようになったと記憶している。

ところが、北海学園大学に奉職してしばらくしたときに、旭川出身のゼミ生から「旭川ではイレブンと言っている」と聞いた。2000年前後だったと思う。そこで、研究テーマになり得るので、卒論のテーマにしたかどうかとアドバイスしたが、結局その学生は別の方面に関心が向いていたようだった。しかし、私は、これは調べてみると面白いのでは、という気持ちを持ち続けていた。かといって専門外でもあり、自分の教育・研究で手が回らない状態であったので、学生にアンケート調査をしてある程度の傾向だけでも掴みたいと考えた。そうしないと、いずれ「イレブン」は消えてしまうのではないか、と思っていた。

2005年の「日本語学概論」の講義は毎年、人文学部1年生のほぼ全員（200名程度）が履修しており、札幌圏が中心とは言え、全道各地からの学生がいて、しかも札幌になじんでいない時期の1年生であるので、このような地域言語調査には比較的適していた。その調査に加え、学生の有志が追加調査したものが、2006年に発行された「人文フォーラム」24号にレポートが掲載されている。これと比較するべく、2017年度にも同様の調査（学生＋追加調査）をしたので、以下に示してみる。追加調査とは、特に上川・空知を中心にした出身学生に依頼して高校時代の友人に聞き取

りやSNSなどで調査して補足したものである。ただ、年度も学生の出身も同一ではないので、数値上は地域毎のバランスがとれているとはいいがたい。なので、実数による比較というよりも「セブン」「イレブン」と略称する割合と、その変化に注目していくことになる。

この2回の調査の内、本稿では、札幌市および石狩管内、旭川市および上川管内、岩見沢市および空知管内のみ掲載する。それを2005年調査、2017年調査の実数を上げたうえで、管内全体の比率を示す。大きく差が開いている部分は（96%など）一方を省いて見やすくした。

表1 3地域における呼称の推移

	2005		2017	
	セブン	イレブン	セブン	イレブン
札幌	103	5	59	1
石狩管内	120	5	71	1
管内比率	96%		99%	
旭川	5	78	27	40
上川管内	10	94	45	47
管内比率	96%		49%	51%
岩見沢	1	8	4	0
空知管内	15	19	6	0
管内比率	44%	56%	100%	

表1を見ると、札幌を中心とする石狩管内は一貫して「セブン」が圧倒的であり、変化はない。それに対して、旭川を中心とする上川管内は2005年には「イレブン」が圧倒的であったのに対して、2017年調査では拮抗した結果となっている。

興味深いのは、その二大都市圏に挟まれた岩見沢市および空知管内は、当初ほぼ半数ずつの呼称であったものが、2017年調査に至って石狩管内と同じ「セブン」に集約されている。この結果は、人の移動と交通・通信・メディアの発展変化の問題に関わるものであり、言語の分野でも共通語化とされる問題として指摘できよう。

ただ、それにしても上川管内には依然として「イレブン」の呼称が根強く残っているのは一度定着した呼称や文化がそうたやすく変化するものではないことも示唆している。

2 「アボカド」か「アボガド」か

この調査は、日本語学概論の音声学習の補助として数年前から始めたもので、本来英語の「avocado」というつづり通りであれば、外来語として日本語化した場合、「アボカド」となるべきところ

ろを「カ」の無声子音「k」が前後の母音に挟まれて有声化し「アボガド」となる不完全同化という現象として説明できる。

このアボカドは、筆者が学生の頃 1980 年代は、見たことはもちろん食べたこともなかった。ところが、1990 年代に東京の知人に手作りの食事会に誘われたときに、初めて目にし、わさび醤油につけて食べた記憶がある。

その後、日本ではエスニックブームにのってメキシコ料理や、アメリカやハワイの人気ハンバーガーショップが東京などに上陸して大行列が出来るなど評判を博した。このトッピングやソースとして盛んに使用されだしたのが「アボカド」である。現在では、一般のスーパーなどでも目にする事が多くなった。

下記の写真は、スーパーに貼られた商品パネルやチラシに書かれた、「カ」が有声化した「アボ



ガド」の表記例である。現在でも、時折目にする事が出来る。

さて、このような状況で学生はどのように認識しているのか、下記に、複数年にわたって日本語学概論の講義で調査した結果を示していく。

	アボ <u>カ</u> ド	アボ <u>ガ</u> ド
2018 年	42 (76%)	12 (22%)
2017 年	88 (71%)	35 (28%)
2016 年	28 (74%)	10 (26%)
2015 年	94 (64%)	52 (36%)
2014 年	24 (51%)	23 (49%)

過去5年間にわたる受講生に対する調査からは、次第に本来の英語表記に近い外来語としての「アボカド」が増えている傾向が見られる。下線部で示したように、2014年の調査ではほぼ拮抗していた両者が、現在では本来の英語表記によるものが4分の3を超え、優勢である。日本の食生活に、特に外食産業を中心に食品としてのアボカドが流通するようになり、あるいは、本学学生であれば飲食業へのアルバイトなどを通じて、いわゆる「正しい」用法としてのアボカドを学習していった結果かもしれない。

3 まとめ

以上、2つの経年的調査を見た場合、次の点が指摘できる。コンビニの略称に関しては、北海道における文化の発信地である札幌（石狩管内）で使用される用法へと集約していく傾向が見て取れるものの、それでも地域語としての用法も廃れていかないことも確かめられた。今後、10年後にも同じ調査をして、その変化をみたいと考える。また、「イレブン」という地域は関東地方にも存在しているらしいことを最近知った。これについては、検討していないが、同時発生的な略称として興味深い。

もう一つの「アボカド」に関しては、食品としての流通が一般化していくとともに、英語由来の外来語としての表記が定着していく過程を観察している。この調査に関しても今後毎年続けていきたい。

言語変化は、思ったよりも複雑で気まぐれなのかも知れない。

【日本語教育に関する卒業論文紹介】

外国人技能実習生に向けた 日本語教科書案の作成

～オホーツク海沿岸部に来る技能実習生編～

論文（2018年度卒業論文） 及川 凜華
（要約）人文学部教授 菅 泰雄

はじめに

現在、日本国内では外国人技能実習制度が多く取り入れられている。筆者の地元である北海道枝幸郡枝幸町の水産加工場でもこの制度が採用されている。同水産加工場では、ベトナムと中国からの技能実習生の受け入れを行っている。その技能実習生の方たちと話をする機会があった。技能実習生たちは非常に日本語が達者で、日常会話程度のレベルは優に超えていた。「オバンデス」や「シャッコイ」などの方言も、理解し使っていた。しかし、「仕事内容を学びながら独学で方言の勉強をするのは本当に大変だった。」との声があった。教わっていない方言に直面した時に非常に戸惑ってしまったようだ。

そこで、技能実習生にとって「方言」を学ぶということが技能実習を行う上での負担になっていることを知った。オホーツク海沿岸部では日常、方言が飛び交っている。このような環境は技能実習生のストレスに繋がっている可能性があると思われる。

技能実習生の言語習得に対する負担を軽減するためにも、事前に外国人技能実習生に向けて行われている日本語教育に「方言」も付け加えるべきだと思う。しかしながら、技能実習生が学ぶべき日本語の優先順位を考えると、事前に行う研修に「方言」の項目を追加することは現実的ではないかもしれない。そこで、オホーツク海沿岸部でよく使われている方言や技能実習の場で使いそうな言葉をまとめた教科書を作るべきだと考えた。

第1章 外国人技能実習制度についての概要

1-1 外国人技能実習制度とは

外国人技能実習制度は、「外国人の技能実習生が、日本において企業や個人事業主等の実習実施者と雇用関係を結び、出身国において修得が困難な技能等の修得・習熟・熟達を図るもの」で、期間は最長5年とされ、技能等の修得は、技能実習計画に基づいて行われるものである。その目的・趣旨は、日本で培われた技能、技術又は知識の開発途上地域等への移転を図り、開発途上地域等の経済発展を担う「人づくり」に寄与するという、国際協力の推進である。

技能実習生の区分は、企業単独型と団体監理型の受け入れ方式ごとに、入国後1年目の技能等を修得する活動（第1号技能実習）、2・3年目の技能等に習熟するための活動（第2号技能実習）、4

年目・5年目の技能等に熟達する活動（第3号技能実習）の3つに分けられる。入国1年目（技能等を習得）は、企業単独型の場合だと「技能実習第1号イ」の在留資格が必要となり、団体監理型の場合だと「技能実習第1号ロ」という在留資格が必要となる。入国2・3年目（技能等に習熟）は、企業単独型の場合だと、「技能実習第2号イ」という在留資格が必要となり、団体監理型の場合だと「技能実習第2号ロ」という在留資格が必要となる。入国4・5年目（技能等に熟達）は、企業単独の場合だと「技能実習第3号イ」という在留資格が必要になり、団体監理型の場合だと「技能実習第3号ロ」という在留資格が必要になる。

そして、技能実習生は入国してから帰国するまでに様々な試験を受けなければならない。まずは、入国の約5か月前に、事前準備として技能実習計画第1号準備を行う。その後、技能実習計画認定申請を行い、在留資格認定証明書交付申請を行う。この手続きをすべて終え、査証申請も行い、全ての申請が通ると日本への入国が認められる。入国してからは、1年目の技能実習が終わるころに基礎級受験（実技試験及び学科試験必須）を受験し、合格した者のみで在留資格変更又は取得できる。3年目が終わるころには3級の受験（実技試験必須）をし、合格した者のみで在留資格変更又は取得できる。5年目の終わるころには2級を受験することができる。この試験を受験してから帰国するという流れになっている。技能実習生たちは、このような様々な試験を受けて、日本の技術を母国に持ち帰ることになる。

1-2 日本で行っている日本語教育の内容

技能実習の受け入れでは、管理団体（企業単独型受け入れの場合は企業）が講習を行うことが上陸基準省令で義務付けられている。公益財団法人国際研修協力機構（JITCO）が作成した『講習の日本語指導ガイド』によれば、講習の時間数と内容、学習目的は以下のとおりである。

講習の時間数

〈技能実習生の活動予定時間の6分の1以上〉

例えば、団体監理型受入れの技能実習生の活動時間が1920時間と予定されている場合、その6分の1である320時間以上の講習を行わなければならない。

〈入国前の6ヶ月以内に、1ヶ月以上かけて160時間以上の講習を行った場合は、入国後の講習は12分の1以上〉

例えば、団体監理型受入れの技能実習生の活動時間が1920時間で、入国前の6ヶ月以内に1ヶ月以上かけて160時間以上の講習を行った場合、入国後は1920時間の12分の1である160時間以上の講習を行わなければならない。

講習の内容

講習では以下の内容を全て取り扱うよう定められている。

- ①日本語
- ②日本での生活一般に関する知識
- ③技能実習生の法的保護に必要な情報
- ④円滑な技能等の習得に資する知識

技能実習生が日本語を使用する目的

→「技能等を習得する」「健康に安全に暮らす」など。

そのためにどんなことを理解し、話せるといいか

→「作業の指示の言葉を理解する」「病気やけがの時に知らせる」など。

このように、実際に外国人技能実習生が学んでいる日本語は日常生活に必要な最低限の日本語であり、方言については、残念ながら限られた研修時間の中で優先すべきものではないのである。

第2章 外国人技能実習生の日本語教育に対する思い

現在日本で行われている日本語教育に対して技能実習生たちはどのように感じているのか、北海道枝幸郡枝幸町の水産加工場の技能実習生に対する調査結果は、以下の通りである。

Aさん：枝幸漁業協同組合（2018年12月現在、25名の中国人を受け入れている）、中国人技能実習生。30代女性。来日3年目、2018年末までに帰国予定。

Bさん：有限会社丸二英光水産（2018年12月現在、8名のベトナム人を受け入れている）、ベトナム人技能実習生。20代女性。来日5年目。

質問1 「技能実習の期間」

A：水産加工の実技試験はあるが、日本語の試験はない。自主的に日本語検定試験を受ける者もいる。

B：3～5年間。ホタテを剥くなどの技能試験と筆記試験（この機械は何のために使用するものか）が2年目と4年目であり、すべて合格すると5年間技能実習を受けられる。有限会社丸二英光水産では、早く日本語を覚えてもらうために、必ず5年目の実習生がいるうちに新しい実習生の受け入れを行っている。

質問2 「どこでどれくらいの期間、日本語を学んできたか」

A：中国で3か月間。日本に来てからは研修のようなものはなかったので、中国から持ってきた音声付きの教科書を使い、独学で勉強している。

B：日本に来る前に3～6か月。日本に来てから大阪で1か月間の研修を受けた。日常会話程度の内容だった。

質問3 「加工場で働く日本人とコミュニケーションを図る中での困難」

A：中国では、「です・ます調」で日本語を教えられてきたが、現場で実際に使われていた言葉は「だ・である調」だった。学んできた内容と異なり、時々聞き取れないことがあった。

B：大阪で日本語研修を受けたため、発音の違いに戸惑った。加工場の職員は、ベトナム語を覚えようとはしていない。分からない言葉が出てきた場合は、ホワイトボードなどを使って何度も繰り返し伝え続ける。

質問4 「酒という単語は教わっていたがビールやプレモルという単語は教わっていなかったというように、実際に現場で使用する言葉を教わっていないという経験はあるか」

A：すぐには思いつかないが、そういうケースはたくさんあった。

B：ある。切るという単語は教わっていたが、おろすやさばくという単語は教わらなかった。実際には、切るという単語よりも、おろすやさばくという単語のほうが使う。冷凍の魚は冷凍というのに、冷蔵のことは“ナマ”という。魚の種類も、鮭だけでもアキサケ・ベニサケ・トラウトサーモンがある。ベニサケはベトナムにはない。

質問5 「その地域で使う言葉や、専門用語などをまとめた簡単な教科書があったらどうか」

A：そのような教科書があるとすごく助かる。仕事がしやすくなる。

B：簡単なものでも、あるのとないのとは仕事のやりやすさが全然違う。

このような技能実習生たちの話を聞き、方言を学ぶということは仕事をする上で、非常に重要であることが分かった。また、「ゴミステーションがごみ置き場だということが分からなかった。」という体験談も話してくれた。方言を知るということは、技能実習の場だけでなく、私生活でも重要な役割を果たすのだということが分かる。

第3章 教科書に取り上げる語彙の選定

3-1 オホーツク海沿岸部在住の方へのアンケートの集計結果

オホーツク海沿岸部で働く技能実習生に向けた教科書の作成を行うにあたって、オホーツク海沿岸部在住の82人に、アンケート調査を実施した。その結果を以下にまとめる。

〈調査結果の概要〉

見野・朝日（2018）で、取り上げられている北海道方言の中から、枝幸町で使用されている方言16語を選び出した。その基準は、枝幸町出身の筆者（20代女性）・父（50代）・祖母（70代）の三世代で普段使用しているもの（意味は理解できるが普段使用しない方言は省く）である。その16語は、次に示す通りである。

「アオタン」（あざ）、「アズマシイ*1」（気持ち良い）、「アズマシイ*2」（満足のいく）、「アッペ」（反対）、「ウルカス」（水にひたす）、「オバンデス（オバンデシタ）」（夜の挨拶）、「カッチャマス」（引っかけ回す）、「カマカス」（かき混ぜる）、「ゴッペカエス」（失敗する・大損する）、「コワイ」（疲労感）、「シバレル」（寒い）、「シバレル」（凍る）、「シャッコイ」（冷たい）、「タマゲル」（驚く）、「テックリカエル」（ひっくり返る）、「チョベツト」（少量）

次に、この16語についてオホーツク海沿岸部在住の方たちを対象に、2018年11月に、インターネット上で回答することができる『google フォーム』を使用し、「よく使う」、「たまに使う」、「使わない」の3つの選択肢から選ぶ形式でアンケートを行った。

浜頓別町から雄武町までのオホーツク海沿岸部に住む10代（2.5%）、20代（52.5%）、30代（8.5%）、40代（17.1%）、50代（19.5%）の男女82人から回答を得た。

3-2 教科書に取り上げる語彙の選定

前節3-1の調査結果から、次の基準により、教科書に取り上げる10語を選定した。

基準1：「よく使う」＋「たまに使う」＝70%以上の語

基準2：日常生活や技能実習の場で使用する基礎語彙

10語の内訳

1. アオタン
2. アズマシイ（気持ち良いという意味）
3. ウルカス
4. オバンデス・オバンデシタ
5. カマカス（カッチャマス）
6. コワイ
7. シバレル（凍る）
8. シバレル（寒い）
9. シャッコイ
10. タマゲル

第4章 教科書案の作成

ここでは、紙幅の関係で、そのごく一部を示すにとどめる。

(1) おばんです

「こんばんは」という、夜のあいさつです。日本語の授業では、「こんばんは」という言葉を習ってきたと思います。しかし、ここでは、「こんばんは」のほかに「おばんです」という言葉も使います。「おばんでした」ということもあります。

使ってみよう！

〔飲み会で会った A さんと B さん〕

A さん：「B さん、おばんです。」

B さん：「やあ、A さん、おばんでした。」

～番外編～

○魚をさばく・魚をおろす

この二つはどちらも「切る」という意味です。オホーツク海沿岸部では、魚は「切る」ではなく、「さばく」や「おろす」ということが多いです。これから使うことになる言葉です。方言ではありませんが、覚えておいてください。

○実際には『です・ます調』で話している人は少ない

日本語教育では『です・ます調』の日本語を習ってきたと思います。しかし、オホーツク海沿岸部の加工場では『です・ます調』で話している人はあまりいません。このことを覚えておいてください。

○『トラウトサーモン』や『紅サケ』などの魚の種類

技能実習先であるオホーツク海沿岸部の水産加工場で取り扱う可能性があるサケの名前です。方言ではありませんが、こちらも是非覚えておきましょう。

○冷蔵の魚は「なま」という

オホーツク海沿岸部では、冷凍している魚のことは「冷凍の魚」といいますが、冷蔵保存している魚のことを「なまの魚」といいます。実習先の水産加工場では当たり前に使われている言葉ですが、「冷凍は冷凍というのに、なぜ冷蔵の場合のみ言い方が変わるのか。」と疑問に思うかもしれません。覚えておいてください。

第5章 技能実習生受け入れ側の課題

本章では教科書の作成を行う中で気が付いた技能実習生を受け入れる側の課題について述べる。

オホーツク海沿岸部の方に向けて行ったアンケートの自由記述欄には「方言だと知らずに使っていた言葉がたくさんあった。」という意見が多く寄せられた。オホーツク海沿岸部に生まれ育った多くの方は、方言を話しているという意識が無いのだということが分かった。技能実習生に地元の方言を覚えてもらうことももちろん必要なことであるが、その前にまずは技能実習生を受け入れる側が「自分たちは方言を話している」ということをしっかりと認識しておくべきだと思う。地元の方たちが方言を使っている意識がなければ、技能実習生の方たちが意味の分からない方言に直面し

た時に、なにが、なぜ分からないのかということに気付いてあげられず、教えてあげることができないということになる。これが、技能実習生を受け入れる側の課題である。

この課題を解決するためには、地元の方たちに、例えば見野・朝日（2018）のような方言データを、教科書として見てもらうべきだと私は考える。実際に北海道枝幸郡枝幸町出身の私も、この調査データグラフ集を見て、標準語だと思い込んでいた言葉が方言だと知り、衝撃を受けた一人である。地元の方たちが、自分たちは方言を使っているのだという意識をあらかじめ持つていれば、技能実習生たちに『方言』を『方言』としてしっかりと伝えることができるからである。

技能実習生受け入れる側は、自分たちが使っている方言を理解し、技能実習生の方にとって必要な方言を聞いて理解できるレベルで教えることが必要である。技能実習生たちの言語習得の負担を少しでも軽減することになればと思う。

おわりに

今回はオホーツク海沿岸部に焦点を当てて研究を行ってきたが、日本国内には技能実習生の受け入れを行っている企業が数多くある。方言については、オホーツク海沿岸部に限らず全国の技能実習生に対して教えていくべき事柄であるため、地域ごとに技能実習生に向けた教科書の作成をしていくべきだと考える。

そして、技能実習生の方たちへの取材を通して、もう一つ感じたことがある。それは、『生活』に関する教科書の必要性である。技能実習生たちとの雑談の中で「ゴミ出しのルールなど、生活面でも苦労したことが多くある。」という話を耳にした。『生活』の分野においても簡単な教科書の作成を行うことで、技能実習生の負担はさらに軽減されていくと思う。

『技能実習生の負担軽減』ということがこれからの技能実習生受け入れ側に課された課題であると私は考える。『技能実習生の負担』とだけ聞くと、日本に住んでいる私たちは、労働面のことばかり考えてしまう。しかし、実際に働いている技能実習生たちにとっては、慣れない土地で生活をするということがストレスになっているのである。よって、これからは、労働面の配慮だけでなく、生活環境や言語習得に対する負担軽減に努めていってほしいと思う。

参考文献

- <https://www.jitco.or.jp/ja/regulation/index.html> JITCO 公益財団法人国際研修協力機構
- https://www.jitco.or.jp/download/data/nihongo_shido.pdf JITCO 公益財団法人国際研修協力機構『講習の日本語指導ガイド』（p.3～5）
- <http://www.moj.go.jp/content/001228761.pdf> 法務省入国管理局在留審査について
- https://www.jitco.or.jp/system/shokushu-hanni.html#type_job04 JITCO 公益財団法人国際研修協力機構 外国人技能実習制度・「研修」
- 石垣福雄（1991）『増補改訂版 北海道方言辞典』
- 見野久幸・朝日祥之編（2018）『北海道方言の地理的・年齢的勢力分布と動態（2）—若年層（高校生）と壮年層（30歳代～50歳代）での男女別使用—調査データグラフ集 語彙・語法編』

[編集部注：紙幅の関係上、原論文を圧縮した。日本語教科書も割愛せざるを得なかった。]

「大学連携日本語パートナーズ プログラム」に参加して

～雲南師範大学での経験から～

英米文化学科 3 年在学中 齊藤 しほ

今回、私は 7 か月間の日本語パートナーズプログラムの参加を通して、授業では学べない沢山の素晴らしい経験をさせていただきました。このプログラムでは、日本語科の学生と沢山コミュニケーションを取ることを中心に、主に TA として授業に参加しました。

授業は、1 年生の「基礎日本語」「会話」、2 年生の「読解」「会話」、3 年生の「翻訳」「作文」に参加させて頂きました。授業への参加方法は、最初に述べたように TA としての参加でした。はじめは、教授法で学んだ授業形式とは全く違う授業に戸惑うことも沢山ありました。しかし、それは師範大学の先生方も同じで、母語話者である私を授業でどのように使うか戸惑っていたように思います。ですので、私が授業にどのように参加していけるのかを考え、ある授業では教科書の課に合わせたプリントを作成して配り、教科書には載っていない今の日本事情について学生に話をさせてもらいました。

授業では、学生が何を求めているのか、ということを考えることも非常に大切だと感じました。学生によっては、授業の後に授業内容について質問をしにくる学生や、教科書にある会話の例文の朗読を通して発音・イントネーション・アクセントの確認をしに来る学生がいました。さらには、SNS を使って、朗読した音声ファイルを送ってきて指導を求める学生もあり、授業の限られた時間ではなかなか見てあげられなかった部分を丁寧に教えることもできました。すべての学生が質問に来る、ということはもちろんありません。しかし、熱心に日本語学習に取り組んで質問に来てくれた学生には、できる限り寄り添えるように努めました。

また、現地学生の単語テストの採点業務を通して、中国人の日本語学習者が間違える日本語の傾向が見えてきたのは、非常に興味深く、面白いところでした。

実は、学生から文法について質問を受けたときに、その場で答えられないことも何度もありました。そういうときには、私自身の勉強不足を痛感したとともに、やらなければいけないことがまだまだ沢山あると思える瞬間でもありました。そして、答えられなかった内容について勉強し、改めて学生に説明するのです。そうすることで、コミュニケーションを取りながら、学生と私との相互学習になっていました。

実際に日本語学習者と学習の場で接してみなければ分からないことが沢山あります。母語話者から見ると簡単に、当たり前に使っている単語の一つを取ってみても、学生からは「どういう時に使

うのか」「使う人はどのような気持ちの時に使うのか」という質問を沢山されました。こういったことは、日本で授業を受けているだけでは、先生方の話から知識としてはあっても、実際にその場でどのように学生に説明するのがよいのか、どのように説明したら伝わるのか、というところまでは学べません。それは、関わる学生によって出てくる疑問や質問が違うからです。

ここに書かせて頂いたことはすべて、実際に中国に来て授業に参加してみなければ学べなかったことです。

次に、私が生活した昆明について紹介させていただきます。昆明は「春の街」とも呼ばれており、その名の通り冬でも比較的暖かく、いつでも花が咲いています。授業がなくて散歩するときや、学生と出掛けるときにはとても良い天気で過ごしやすかったです。食べ物は辛いものが多いですが、日本人の口に合うものが沢山あります。ですので、食事を十分に楽しむこともできます。

また、授業を通して学生との距離が縮まると、街を案内してくれたり、一緒に映画を観に行ったり、年末年始と一緒に過ごすこともできました。もちろん街へは一人で行くこともできますが、学生が案内してくれた方が色んな所へも行けますし、その時々イベントなどにも誘ってくれたので、観光としても十分に楽しむことができます。

7カ月間の研修ということで、もちろん卒業は1年遅れてしまいましたが、それでも後悔のない素晴らしい経験をさせていただきました。

将来、日本語教員になりたいと思っている皆さまには、機会がありましたら是非、この素晴らしいプログラムに参加して頂きたいです。



「読解」の授業で、真剣にテキストを読む学生達（左側が筆者）

ブラウイジャヤ大学と日本、 日本語教育、そして、日本との交流

インドネシア国立ブラウイジャヤ大学 人文学部日本文学科 専任講師 小川ゆう紀

インドネシアの日本語学習者数が、中国に次いで世界で2番目に多いということはもうみなさんご存知ですね。では、それ以外はどうでしょうか。どのように学習しているのか、どのような環境で勉強しているのか、インドネシアと日本の関係はどのようにになっているのか。ご存知ですか。今回は私が勤めている、国立大学における日本語教育をご紹介しますと思います。

ブラウイジャヤ大学（インドネシア語名：Universitas Brawijaya 以下、UB）は、1963年に創立された比較的新しい国立大学です。日本語関連の学科はもっと新しく、2002年に2年制の短期学科が開かれ、2007年に4年制の日本文学科になりました。そして、2014年には日本語教育学科が設立されて、現在では二つの学科で日本語と日本関連の授業を受けることができます。ネイティブ教師は3名が在籍し、毎年数名の優秀な国費留学生（文部科学省奨学金・日本語日本文化研修生）を輩出しています。ほかにも、弁論大会や漢字カップ（毎年開催される、漢字の知識を競う大会）で学生が多く活躍しています。学科の事務所には優勝カップが多く飾られています。それもあって、インドネシア国内の大学で日本語といえば、UBの名前が必ず上位に出てきます。嬉しいことですね。

前述のとおり、UBでは二つの学科で日本語および、日本関連の授業を受けることができ、毎年約160名の新入生がインドネシア各地から入学してきます。では、どのような学生が入学してくるのでしょうか。学生に聞いてみると、やはりマンガ、アニメ、ドラマやアーティストの影響が強いと感じます。小さいころから日本文化のコンテンツが身近にあったのでしょうか。ですので、マンガやアニメを通じて勉強している学生も多いです。字幕なしでアニメを見ることが目標の学生、将来はマンガを翻訳したいという学生も少なくありません。

今は学生全員がスマートホンを持っています。語彙の意味を調べるのは、インターネットです。漢字の読み方を調べるのは、無料アプリケーションです。日本語学習をする上で、とスマートホンはなくてはならないものになっていますね。ここで面白い学習方法をご紹介します。ある学生は在籍2年次の前期で日本語能力試験N2に合格しました。その学生は、教科書の勉強は授業中だけで、それ以外の時間はインターネット小説を読んでいるとのことでした。新しい勉強方法だと感心した覚えがあります。推理小説や恋愛小説、様々な種類の小説があるそうで、気分によって読む小説を変えるそうです。言葉の意味を調べるのもコピーとペースト機能を使い、難しい文章は翻訳機

能の力を借りるそうです。ほかにも、ドラマで会話、特にビジネス会話を勉強する学生もいます。場面が分かるので、いい勉強法だと思います。同時にお辞儀などの言語行動も勉強できますから。

様々な SNS で遠距離感交流も簡単になりました。学生もチャットで知り合った日本人と日本語で会話しています、同じ趣味の日本人を見つけました！と楽しそうに話す学生をよく見ます。そして、私が勤める日本文学科と日本の交流も盛んに行われています。文化交流や教育実習など学生同士の交流が多く、学生も積極的に参加しています。おもてなし精神はインドネシア人にもあり、食べてほしい食事、見てほしい観光地、知ってほしいインドネシア文化を短い期間で紹介しています。ですので、UB に研修に来る学生は滞在中、忙しそうです。このように実際に日本人と会って話す機会はとても大切です。どんなにインターネット世界が充実していても、チャットではわからない本物が得られますから。学科としても、このような機会をもっと多くの学生に提供したいと考えています。もし、この記事を見てインドネシアの日本語教育を見学してみたいなという方がいらっしゃったら、ご連絡ください。個人でもグループでもご案内します。



学生と教育実習中の日本人大学生と（後ろの中央が筆者）

英国カーディフ大学での 日本語教育実習

2018 年経済学部・地域経済学科卒業 小里美津希

私が日本語教育に興味を持ったきっかけは、留学をしていた際に現地の高校で日本語授業アシスタントのボランティアを行ったことです。その際に、自分の母語である日本語を他国の方が勉強してくれているという事がとても嬉しく、日本語教育について学びたいという思いが芽生えました。帰国後、「日本語教員養成課程」があることを知り、他学部ではありましたが1年間で受講しました。その中で、卒業前に他国の方に直接授業をしてみたいと思っていた中、カーディフ大学での日本語教育実習があることを中川先生より紹介していただき、参加することを決めました。

それまで実習経験がなかった私は、参加にとっても不安を抱えていましたが、カーディフ大学の百濟先生より、「TBLT（タスクベース・ラーニング）とは何か」という基本的な所から実習に必要な知識を丁寧に教えていただき、また実際の授業を見学しながら、実習向け様々な準備を行いました。私は「恋愛」をタスクとし、授業内容を考えていきました。生徒が興味を持ち、意見を発言しやすい環境を作るには、どういった内容にすればよいかを念頭に、百濟先生や実習生の仲間に相談をしながら教案を作成しました。

そのような中で、私は「日本の若者の恋愛離れ」をテーマに設定し、授業を行うことにしました。日本では、昔と比べ「恋人が欲しい」と思っている若者が減少しているという事を知り、他国の学生は恋愛に対してどのような価値観を持っているのか。また日本の若者の恋愛離れについてど

う思うのか。という興味がありこのテーマを設定しました。

ただ「日本の若者の恋愛離れについてどう思う？」と聞いてみても、学生は反応に困ってしまうので、まずは「BRAINSTORMING」として、「今恋愛をしていますか？」と生徒達へ質問をしてみたり、日本人の恋愛に対する意識調査の結果を生徒に見せながら、「恋愛離れ」という意味をしっかりと理解してもらうことから始めました。その後、「LISTING」として、「恋人がいない」理由をペアになって、多い理由を3つ予想してもらいました。ここでは多くの語彙を引き出



(右側が筆者)

すため、事前に出てきそうな語彙を予想し、日本語と英語で説明できるよう準備しました。そして、実際の調査結果と予想を照らし合わせる「MATCHING」を行い、1位である「面倒くさい」という理由について、様々な発言が飛び交い盛り上がりました。最後に、少し難易度が上がり、「PROBLEMSOLVING」として「なぜここ数年で恋人はいらないという人が増加したのか、恋愛離れが進むことによって、今後日本ではどのような問題が予想されるか」ということをグループとなり考え、発表をしてもらいました。

実際に生徒たちの前に立ち授業をした時は、上手く説明ができなかったり、想定外の質問を受けるので難しく、緊張もしました。しかし、何より自分が話していることに生徒が耳を傾け、新しい語彙を覚えつつ、私と日本語で対話をしてくれたことがとても嬉しかったです。

教育実習中は、勉強以外でも生徒達と一緒にランチやパブへ行ったりしながら充実した日々を過ごすことができました。また、他大学の生徒と一緒に実習を行いました。毎日一緒に授業を受け、夜まで実習に向け相談をしながら教案を作成していたのでとても良い関係を築くことが出来、今でも連絡を取る仲間となりました。今回のカーディフ大学での実習は、たくさんのことを学ぶことができ、私にとってかけがえのないものとなりました。

最後に、他学部である私の相談に乗っていただき、ご指導いただいた中川先生、カーディフ大学で沢山のことをご教授いただいた百濟先生、日本語教員養成課程を受講するきっかけをくださった経済学部奥田先生、そして一緒に実習を行った仲間とカーディフ大学の生徒の皆さんに心より感謝いたします。多くのサポートをありがとうございました。



カーディフ大学の学生と日本人教育実習生と食事会（右から3人目が筆者）

英国カーディフ大学での4週間の 日本語教育研修体験から

英米文化学科4年 小林 美咲

2018年2月中旬より4週間にわたり、英国ウェールズ地方にあるカーディフ大学での日本語教育研修に参加した。私達の指導にあたって下さった百濟先生は、タスク主導の教授法（以下TBLT）を用いた日本語教育の研究をされている。TBLTは、テーマに沿った課題を解決しながら授業が展開されていくため、必然的に学生の発言回数やペア、グループワークが多くなるのが特徴である。今回の研修の目的は、TBLTを理解しそれを用いた、学生にとってより効果的な授業の実践である。最終週にそれぞれのテーマで2コマずつ授業を担当した。自身の授業に加えて、私はアシスタント2回、平和について最終日にまとめを担当するなど、多くの授業に携わることができた。

第1週、普段の授業の様子を見学しつつ、分からない言葉やタスクについて学生と一緒に考え、お互いを覚えるための交流期間となった。隣で観察していると、予習復習など授業へ参加する準備がしっかり整っている学生の姿が見られた。授業時間外でも日本について話してくれたり、カーディフ市内に連れ出してくれたり、積極的な学生が多くいたのは、後々授業をする身としては心強かった。また、私達が今回授業を行ったのは日本語クラスの2年生だが、1年生と4年生の授業、他学部の授業（ゼロ初級レベル）も見学させてもらう機会があり、様々なレベルに触れることができたのも良い体験だった。

第2週、第3週は最終週に向けて、各々準備を進めた。私のテーマは図書館だ。日本語教員と同じく履修している図書館司書の分野において、英国の学生の図書館に対する意識を知りたかった。日常生活に結びついており、学生たちにとって比較的とっつきやすいテーマということで、最終週の授業のトップバッターとなった。

タスクを含めた授業の流れとしてはまず、導入を経て、図書館に行く目的をリスティングさせる。次に、誰もが行きたくするような図書館の条件を、蔵書数が多い・家から近い等の選択肢から優先順位を決め、選んだ理由とともに発表させる。いずれも始めはペアでその後全員で意見を共有するようにした。最後に、将来紙の本は絶滅して電子化されると思うかという問いに、YESかNOに分かれて議論をさせるという内容だ。教案やハンドアウトは、指導教員や仲間たちとともに何度も改善した。新出語句の意味と説明の仕方や質問も予測し、自分なりに準備をして臨んだ。

しかし実際に授業が始まってみれば、限られた時間の中で授業をまとめあげることの難しさを痛感した。授業全体の進行や説明に割く時間、学生の発言から派生して脱線するなど思い通りにいかず、納得のいく授業ではなかった。伝えたいことがどれだけ伝わったのか不安もあったが、翌日学生の方から、図書館についていつもは話さないけれど楽しかったと言ってくれた。私同様、学生も

普段と違った雰囲気緊張しながらも、一生懸命発言してくれたのが嬉しかった。意見も多角的な目線で複数持っていて、非常にやりがいを感じることができた。一方で、悩んだ点の一つに学生のレベルの差がある。それを改善する工夫こそが、学生のやる気ひいては教室全体の雰囲気にも影響するのだろう。

終始忙しい日々を過ごしたが、ホストマザーが温かく迎え入れてくれたこと。ルームメイトやともに研修を行った仲間たちがいつも楽しく笑わせてくれたこと。市内観光やパブ巡り、各地への小旅行など毎日が充実していた。出会った人々の優しさに感謝しきりの4週間で、このプログラムに参加できて本当に良かったと思う。



英国カーディフ大学 (Cardiff University) での日本語教育研修

日本文化学科 4 年 齋藤 七菜

私は 2018 年の 2 月から 3 月にかけての 4 週間ほどイギリスのウェールズにあるカーディフという街に滞在し、カーディフ大学で日本語教育の研修をしてきました。カーディフ大学には中川先生の知人の百済正和先生が教鞭をとられていて、日本語教育における Task-based Language Teaching (タスク指導法、以下、TBLT) の研究をされていました。今回私たちは TBLT のことを中心に勉強し、日本語教育の授業を見たり現地の生徒と一緒に授業に取り組んだりして、最後には自分たちで TBLT による授業を行いました。

TBLT とは文字通りタスクを中心とした勉強方法のことです。百済先生に私たちが教わったのは、生徒に課題を与えて考えてもらい、その課題について日本語で相談や発表をしてもらって実践的に日本語を使わせようとする学習方法でした。最終的に自分たちで TBLT による授業が行えるように、研修を前半と後半に分けて行い、前半の 2 週間は英語の語学学校に通って英語の勉強をしながら授業見学をしつつ生徒たちと交流し、後半の週では大学の授業に参加しながら TBLT で生徒に教える準備をしました。

最初にイギリスのカーディフに着いてから、私たちは百済先生に会って一人一人別のホームステイ先に送られました。私のホームステイ先は中心部から少し離れた場所にある観光地の真ん中で、タクシーで家に着くとホストファミリーがとても温かく迎え入れてくれました。私は英語がとても苦手で留学に不安を感じていたのですが、ここでならなんとかやっていけるかもしれないという気持ちになりました。またイギリスの料理は非常にまずいという話をよく耳にしますが、ホストマザーの料理はどれも美味しくホストファミリーはみんなとても優しくかったので、留学中に辛い経験をした時も、彼らが私の心の支えになっていました。

学校が始まってからは、日本の別の学校から百済先生に教わりに来た学生と合流して、英語学校でクラス分けテストを受けて英語の勉強が始まりました。私はテストの結果、一番下のクラスに入れられたのですが、クラスの生徒のほとんどがサウジアラビア人で、文化や性格などの強烈なカルチャーショックを受けながらも、楽しく英語学校に通いました。英語学校の後はカーディフ大学に行って、百済先生から TBLT の講義を受け、授業見学などをしました。

留学中は毎日忙しく、遅くまで学校にいる日もあったのでなかなか観光はできなかったのですが、週末は友達とカーディフから出て一泊二日の小旅行に何度か行きました。旅行ではバスを 4 本乗り継いでコッツウォルズに行ったり、アーサー王の墓があるとされる神秘的なグラストンベリーという小さな村に行ったりしました。旅行中バスが何時間も遅れたり、帰りのバスが運休していて村から出られなかったり、予約したホテルが全く別の村にあったりなど、本当に酷いトラブルに見

舞われましたが、何とか良い経験になり、充実した時間を過ごせました。

最後に自分たちで講義をする実習では、私はホームレスを題材にした授業を行いました。私はイギリスに来てからホームレスを目にすることが多かったのですが、イギリスの人たちがホームレスにお金をあげたり優しい言葉をかけたりしているのを何度か目にすることがあり、そこに日本との大きな違いを感じていました。イギリスではホームレスのことが大きな社会問題になっているようで、日本との意識の差がかなりありました。そこで私も、百済先生に教わった TBLT を使って生徒達にホームレス問題について意見を交わしてもらいました。様子を見てみると、普段はあまり自分から発言しない生徒も、自分の意見をはっきり持っていて、それを話すために日本語を一生懸命積極的に使ってくれていて、授業方法の効果を認識すると同時に、とても嬉しい気持ちになりました。また生徒達は私が英語が苦手なのを分かっていたため、授業中私が英語につまるとみんなで翻訳して助けてくれて、結果としてなんとか実習を終えることが出来ました。

私はカーディフでの実習を通して、強い心やしづとさ、少しの英語力、そして TBLT の知識を身につけることが出来たと思います。全体を通して非常に有意義な研修でした。みなさんも是非、留学や実習の機会があれば参加してみたいです。



2018 年度「日本語教育特別演習」

—日本語ボランティア「たんぽぽ」での実習を終えて—

日本文学科 2 部 3 年 岩倉 玲

2018 年 9 月より 12 月までの約 4 ヶ月間、札幌エルプラザで行われている日本語のボランティア教室「たんぽぽ」での秋コースの実習に参加させて頂きました。

「たんぽぽ」は 1993 年にスタート、札幌市や市内近郊の外国人へ日本語を教えるボランティア活動を行っており、25 年以上の活動実績のある日本語教室です。多くの外国の方々が日本語の勉強に通われており、留学生・研修実習生・主婦・一般社会人等、様々な方が日本語を学ばれています。

「たんぽぽ」では学習者のレベルを初級Ⅰ・初級Ⅱ・中級と 3 つのクラスに分けて毎週金曜日、週 1 回クラスレッスンを行なっていて、各クラスではチームティーチング方式（教壇に立つ担当教師とアシスタント教師とが共に行う学習スタイル）をとっており、きめ細かく学習者のレベルをカバーしています。

私は今回、初級Ⅱのクラスでの実習に参加させて頂きました。このクラスでは N4・N5 クラスの学習内容が中心で、この秋コースには中国・台湾・韓国・ベトナムの各々の国から毎回 7～8 名の学習者が参加していました。12 月に行われた JLPT 日本語能力試験にも挑戦した方が何名かおり、3 名の方が N4 に合格し秋コースの後の冬コースでは初級Ⅱのクラスから中級に移り学習していました。

私はこの初級Ⅱクラスで、今回 3 回の担当教師（T）をさせて頂き、他の回はアシスタント教師（TA）として実習させて頂きました。

初級Ⅱの授業は 12 時 30 分スタート 2 時に終了、1 時間 30 分の授業なのですが、授業開始前の 30 分は当日担当の教師 T から授業に関しての教案説明・方針の打ち合わせを行い、T と TA の授業での連携を図ります。授業終了後は約 1 時間、当日行った授業を振り返り今後の改善点を抽出し、次回への反省・参考となるよう前後の打ち合わせも充実させて、学習者へのレベル向上について常に意識づけが行われています。

今回の秋コースでの教材は、日本においての日常生活や社会活動に必要なコミュニケーションが「できる」ようになることを最優先の課題として掲げ、語句や文型を学んでから会話の学習をするのではなく、日常のそれぞれの場面を想定したモデル会話を教材に取り入れ、実際の場面で活用できる場面会話を重視した教材構成となっていました。担当教師である T は毎回の授業の最後の時間で学習者が当日習った場面を想定した会話をロールプレイのような形式で発話できることを各回の目標として授業を組み立てていました。

私も T を行う際は教案づくりの段階から中川教授の指導を仰ぎながら副教材や絵カード等の作

成を行いつつ、学習者が言葉を使うという事にいかに満足してもらえるかを考え、また今後一生使っていくであろう言葉を教えているのだということを意識しつつ担当Tにチャレンジさせて頂きました。しかし事前の教案づくりの段階での授業想定と、実際の現場で教えることの違いを痛感しました。それは教案通りに進行しているときは良いのですが、イレギュラーなことが起こった場合（例えば学習者から想定外の質問が出てきてその質問に答えるような場合）は、初級Ⅱの学習者が理解できる言葉であったり、適切な場面を設定して説明してあげたりする必要があって、自分の中で語彙コントロールが出来ていなかった時であるとか場面を描けなかった時などは動揺して思考が止まってしまうような感じになることもありました。そのような時は「たんぽぽ」のチームティーチングの良さが発揮されて他のTAの先生がフォローの手を差し伸べてくれました。教えるということの難しさを痛感させられました。

添付の写真は韓国の学習者が差し入れてくれたドーナッツを食べながらみんなで撮った写真です。休みで国に帰って来たようなときにも、お土産を頂いたりしてクラスでの雰囲気は明るく和気藹々として非常に楽しい時間を過ごすことができました。

最後に、入管法改正に伴う在留資格の変更等の法改正により今後益々多くの外国の方々が日本に来ることが予想されます。それと同時に日本語学習に対するニーズも更に高まっていくことでしょう。そのような状況の中では日本語教師への要請は公私においても愈々増大していくことが想定され、質の高い日本語教員養成ということが問われるのは必然であると思われます。

本学における日本語教員養成課程での、日本語ボランティア「たんぽぽ」での演習や海外の提携大学での日本語教育実習研修の取り組みは、まさにこのようなことに対応した特徴ある優れたカリキュラムであると考えます。と共に私にとって今回の演習は貴重な体験でありました。この貴重な体験を活かすためにも日本語ボランティアの活動に今後も関わっていきたいと考えております。



初級クラスⅡの学習者、ボランティアの方々と（一番左側が筆者）

「日本語教育特別演習」

日本語教室で実習した授業の概要

(教案と感想)

英米文化学科3年 木下 詩織

担当授業：11/2 「いらっしゃいませ」

学習者の国籍：インドネシア、コロンビア、台湾、ニュージーランド、タイ

学習者の概要：留学生、既婚（子どもがいる人もいる）、日本人女性と結婚している人

学習目標：他の人を誘うことができる（～しにいきませんか）。飲食店で人数を言うことができる。

語彙、表現：①おなががすきました ②なんめいさま ③では ④こちら ⑤花火

⑥おでかけ ⑦～人 ⑧映画 ⑨泳ぐ ⑩海

【 教 案 】

時間	項目	内容	教材
10:30	挨拶 アイスブレイキング	挨拶、出席確認 自己紹介（私は〇〇です。～から来ました。どうぞよろしく。）	
10:35	コーラス モデル会話① (前半のみ)	動詞の練習 ～します 新出動詞「泳ぐ」はこの時に説明 「今日はレストランへ行きます。」 マリー（TA： ） キム（TA： ）	絵カード 写真（海） ダイアログ
10:45	コーラス ペア練習	～します → ～しませんか → ～しましょう TA → L ①の練習 会話だけではなくテキストの表に動詞の変化を書いてみる	絵カード テキスト p23
11:05	導入② コーラス ペア練習	～しに行きませんかと～しませんかの違い ～しに行きませんかの練習 導入①でやった動詞を一通りこの言い方で練習 L → L ①、②の練習 ①は表の動詞を変化させて上の会話に代入練習 さっぱりえきは別の場所にしても O.K. TA さんは会話を聞きながら動詞の変化をチェック ①のところを発表（例文通りでも変えても OK）	絵カード テキスト p24
11:25	発表	1 ペア二回ずつ	

11:35	モデル会話② (全部) 語彙確認 コーラス ペア練習	てんいん (TA:) マリー (TA:) なんめいさまですか→人数 人数の言い方 L→L マリー役、キムと店員役に分かれて交互にどちらも練習	ダイアログ サブテキスト p44
11:50	発表	Lを選びTが配役を決めやっもらう (なので、その前のペア練習で全部できるようになる！)	
12:00		次回の担当、場所の確認 挨拶	

当日の進行は概ね教案通りに進んだ。TAの協力の下、練習時間も多く取った。話す、読む、聞くだけでなく書くことも取り入れ4技能を使うことを意識した。コーラスで言うことはできても、動詞の変化を実際に文字で書くと間違えることがあり理解を深めるために効果的だった。しっかりと練習時間をとったことで発表も楽しくすることができ、達成感も感じられたように思う。ただ、練習時間と練習する分量が釣り合っておらず、テキストが終わると、TAの裁量で自由に話す時間になってしまった。慣れているTAはうまく進行してくれたが、会話が止まってしまうペアもあった。その時に、クラスを周りながらフォローもできた。授業終了後、TAからの講評は大変良いものであり、嬉しかった。

初めて90分授業を行ったが、事前準備をしっかり行ったこと、またTAの多大な協力により無事終えることができた。全体の感想としては、学ぶこともたくさんあり反省する点もあったがとても楽しかった。

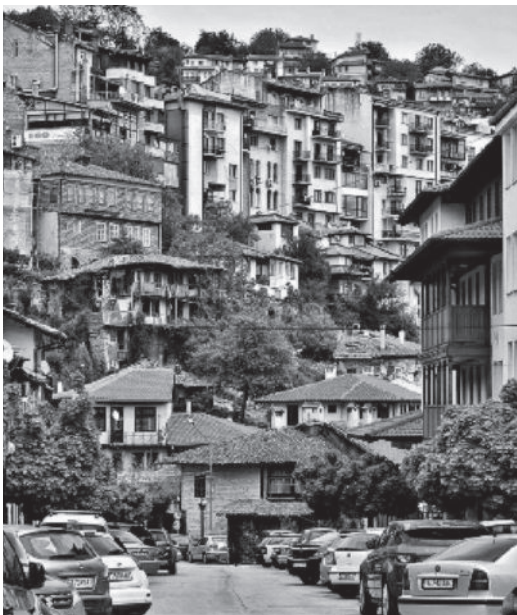


初級Ⅰの学習者とボランティアの方々（後列右側が筆者）

ブルガリアの日本語教育現場から

～ヴェリコ・タルノボ大学

ヴェリコ・タルノボ大学日本語講師、2017 年日本文化学科 2 部卒業 **岡田 佳子**



2018 年 9 月から 2019 年 6 月までの 9 か月間、ブルガリア北東部の町ヴェリコ・タルノボにある国立大学で日本語講師をしている。ここはヴェリコ・タルノボ州の州都でもあり人口は 7.5 万人ほどの小さな町だが、第二次ブルガリア帝国の首都として多くの観光資源で有名である。夏には近隣諸国をはじめ西ヨーロッパやアジアからの観光客で賑わう。職人街が連なる旧市街とツアレベツ要塞は観光の目玉で、ヤントラ川沿いの急斜面に立ち並ぶ素朴な家並みは異国情緒たっぷりである。またここには定年後移住してきた外国人が多数住んでいるが、ブルガリア人で英語を話すのは若い人と観光客向けの店の店員くらいでなかなか英語が通じない…。とは言え日本と同じ状況であると

言えるのかもしれない。共産主義時代の名残で私と同年代の人達は英語ではなくロシア語を学校で学んでいたそうだ。来た当初はニコリともしないブルガリア人の対応に辟易していた時期もあったが、滞在が 5 か月を過ぎた今では、私がニコリすると微笑み返してくれたり挨拶を返してくれたりすることが増えた。

ここヴェリコ・タルノボ「聖キリルと聖メトディ」大学（以下、ヴェリコ・タルノボ大学）文献学部古典・東洋言語文化学科で日本語を学んでいる学生は、現在 1 年生 27 人、2 年生 15 人、3 年生 12 人、4 年生 10 人の合計 64 人が在籍している。しかし途中でいなくなったり落第する学生も少なくないため学生数は流動的である。聖キリルと聖メトディはブルガリアやロシアで使われているキリル文字を考案した人物で、大学には二人の銅像が立っている。授業数は前期を例に挙げると、週に 1 年生 7 時間、2 年生 5 時間、3 年生 6 時間、4 年生 9 時間である。私は週に 5 時間（5 コマ）、各クラス週に一回のペースで主に会話・聴解・読解を担当している。使用教科書は『みんなの日本語』初級Ⅰ～中級Ⅱ、『毎日の聞き取り』、『読めるトピック』、聴解タスク、やさしい作文、文法、漢字など、4 技能をバランス良く育成している。授業は 4 人のブルガリア人教師と私が全部のクラスに入るよう工夫されており、一か月ごとに授業内容を細かく指示した予定表が貼りだされ



私はその通りに授業を進めれば良い。授業の自由度は低いが授業内容を考える必要がないので楽だとも言える。また単元の終わりには漢字テスト、語彙テスト、復習テストをこまめに行い評価は試験終了後すぐに学生に詳しく知らせていた。学生たちの多くは日本のサブカルチャーをきっかけに日本語を勉強し始めたようだが、大変な勢いで詰め込まれる文字・漢字・文法にも良くついてきていると感心している。学生たちは優しく明るくとても助けられている。学生の中には夏休みなどにイギリスやアメリカで仕事をして、自分で学費や寮費を稼いでいる子が少なくない。いい仕事につくのは大変なことだと聞いた。何か私にできることはないだろうかと考えてしまう。

大学以外の生活にも少し触れておこうと思う。私は学生時代に大学のサークルでフォークダンスを踊っていた。フォークダンスと言っても小学校で踊ったマイムマイムとは全く別世界のものだ。ブルガリアは貧しい国と聞いているが伝統文化が日常にしっかりと残っており、フォークダンスもその一つで人々はそれを誇りにしている。私はここでフォークダンスのクラブに所属しているが、日本人がブルガリアのダンスを踊っているということで珍しがられ多くのメディアに取材をされた。また外国人の私が踊っていることで興味のなかったブルガリア人学生たちが自分達の伝統的な踊りを見直すようにもなった。全く予想しなかったことであるが大変嬉しい。残りの3か月を悔いのないよう過ごそうとしみじみ感じている最近である。



ロシア ヴラヂーミルへの 短期留学の経験から

2018 年日本文化学科卒業 中村 遥

2018 年 2 月、大学卒業の少し前に私はロシアのヴラヂーミルへ短期留学に行った。外は勿論寒く、留学前に厚手の上着を買っておいて本当に良かった。その反面、室内は暖かいので厚着したまままだと汗をかくこともあるほどだった。留学中はヴラヂーミル大学近くの学生寮で二人一部屋にて過ごした。買い物は近くの大型スーパーに行き、そこで毎日の食料品を買った。生活面で必要なものはほとんどそこでまかなった。基本的に食事は自炊だが、お昼は学食でとることもあった。大学での授業は基本的に毎日複数科目あり、今回の留学ではロシア語の他に社会事情やロシアの歴史を受けた。いずれもロシア語のみで行われる授業であったので、慣れるまでに時間がかかった。ロシア語でのまたクラスはレベル別に幾つかあり、学生たちも様々な国からの留学生がいた。私もエジプト人やベトナム人やドイツ人、トルクメニスタン人などたくさんの学生達と一緒に授業を受けた。宿題は文法問題以外に本文全文暗唱があり、はじめは特に大変であったが有意義でもあった。そうした授業の流れにも慣れた頃には帰国間近で、ヴラヂーミルにも授業にも名残惜しく感じていた。因みに帰国の数日前、私は留学でお世話になった感謝も込めつつ、簡易的な書道体験のクラスを企画して開いた。普段の授業が同じクラスメイトが来てくれた。今後さらに少しでも日本文化に興味を持ってもらえたら良いなとも思った。仲良くなった一人のチェニジア人学生は私の帰国前に、別れのあいさつに来てくれた。一方で、授業後や休日ではロシア人学生が市内を案内してくれ、歴史的建造物や教会などを見物する事が出来た。また冬送りのお祭りである「マースレニツァ」にも行った。移動の際のバス運賃は日本円で約 40 円と安いことも印象的だった。因みに、タクシー代も日本の半分以下で、いかに日本の移動にかかる料金が高いか、という印象であった。また連休に併せて、サンクトペテルブルクとモスクワに小旅行もした。旅行中は聖堂や宮殿、サーカスなど本当にたくさんのものを見ることができ、とても有意義であった。モスクワでは以前サハリン大学から北海学園大学に留学に来ていたロシア人の友達と再開する機会があった。彼も日本語を学んでいたのも、私たちはロシア語と日本語を折り混ぜながら会話をしていた。この外国語学習による縁は本当に感慨深かった。因みに、ロシアの地下鉄については日本との違いが面白かった。内装の雰囲気が違ったり、突然壁が開いたかと思うとそこから車両の乗降をしたり、エスカレーターがものすごく長かったりしていた。

ところで、現地での日本語学習の様子を分かった範囲で紹介する。留学先でのヴラヂーミル大学には日本語の講義自体が無いため、学びたい学生は例えば通っている大学以外の学校や家庭教師などに、つまり個人的かつお金を払って日本語を学んでいるとのことであった。私が現地でお世話になった学生 A 君の場合は、ヴラヂーミルにある外国語学校で学んでおり、ロシア人の日本語教師

に教わっている。他の外国語授業との掛け持ちの中でその先生が担当しており、他に日本人の教師などはない印象であった。教科書は『まるごと』を使っていた。因みに A 君は幼いころに日本の神話について聞いたことがある、寺など日本の建築や建物について興味があると言っており、それも日本語学習へのきっかけになったと思われる。また、現在理系の企業で働いている B さんにも話を聞いた。B 君は漢字が好きなようで、どうして日本語を学ぶのかについては将来日本で働きたいと話していた。日本語や日本文化への興味に関しては日本のアニメにも興味があり知っていると話し、それらが学習のモチベーションに繋がっている印象を受けた。因みに、この外国語学校での日本語のクラスは幾つか設けられているらしく、違う日に訪れた日本人学生に聞くと、その時行われていた授業のクラスには 10 代の学生が 4~5 人いたそうだった。

最後に、この留学は本当に有意義で良いものであったと本当に感じ、ロシアの文化そして言語の学習を更に深めたい意欲につながった。また今回ヴラヂーミルでは自分たち以外の日本人を見ることが無かったのだが、そんな現地で日本語や日本文化に興味を持ち学んでいる学生・人々がいることはとても嬉しく、同時に今後彼らの学習の環境や機会がより一層増えることを祈る。

以上、大変な面もありながらとても有意義なロシアヴラヂーミルの留学であった。



ヴラヂーミルの春を迎える祭りで仲間達と（右側が筆者）

介護分野の技能実習生に対する 日本語教育を経験して

文学研究科研究生 守岡みのり
文学研究科修士2年 田澤あす美

本文では、介護分野の技能実習生（以下、実習生）3名に対して実施した入国後日本語講習（以下、入国後講習）での経験を踏まえ、実践報告を行う。

出身国、母語	ミャンマー、ミャンマー語（非漢字圏）
入国前日本語学習歴	2016年10月～2018年5月（1年半）
能力試験級	N3：1名 N4：2名
現地学習環境	現地（ヤンゴン市内）日本語学校
現地の使用教材	『みんなの日本語Ⅰ・Ⅱ』（スリーエーネットワーク） 『専門日本語入門 場面から学ぶ介護の日本語【本冊】』（凡人社）
入国後講習期間	2019年1月21日～2019年2月25日（20日間、計120時間） 午前9時～午後4時（月曜日～木曜日）
使用教材	『外国人のための 会話で学ぼう！介護の日本語—指示が分かる、報告が出来る—』（中央法規） 『シャドーイングで学ぶ 介護の日本語 場面別声かけ表現集』（凡人社） 『日本語NAT-TEST 3級公式問題集～日本語能力試験N3対策問題集～』（専門教育出版） 『介護・看護の漢字とことば N3レベル編』（三修社） 『合格できる日本語能力試験N3』（アルク）
施設での実習開始日	2019年3月1日
能力試験時期	日本語能力試験（JLPT）7月（札幌） 日本語NAT-TEST 4月、6月、8月（東京） ※入国時期、在留資格申請の関係上、9月までに合格証が必要

1. 全体の振り返り

入国後講習において、当初我々は「実習現場に必要な介護専門用語、日本語運用能力」の育成に重点を置きカリキュラムを作成した。しかし、介護分野における実習生の2年次の在留資格「技能実習2号」取得に、JLPT（日本語能力検定）のN3（またはそれに準ずる資格）が必要とされること、また実習生と接して「在留資格のた

科目	時間数	講師
総合日本語	40	守岡
会話	16	守岡
聴解	10	守岡
文字	12	田澤
読解	8	田澤
作文	4	田澤

めの JLPT 対策」の喫緊性を感じた我々は、カリキュラムの再考を図った。そこで、田澤が担当する「文字」「作文」「読解」の科目を試験対策に、守岡が担当する「総合日本語」を介護場面における日本語の学習、「聴解」を申し送りの聞き取り練習、「会話」を発声練習や業務報告練習に置き換えて練習を行った。

介護の日本語	28	講師 H
初回ガイダンス	2	講師 H

2. 試験対策について

講習開始時は、介護の日本語と JLPT 対策で重複する部分を教える手法を取り、文字の導入を試みた。例えば「菜」という漢字は JLPT N3 で「野菜」として使われるが、介護のテキストでは「菜の花のおひたし」とあった。実習生にとって「野菜」は既習の語彙であるが、「菜の花」も「おひたし」も未習で、それを細かく導入していくことに時間の制約上、限界があったため、試験対策と介護の日本語とを分け、指導していくことにした。入国後講習の後、実習生がどれほど日本語の勉強に時間をさけるのかが不明だったため、講習期間中はかなりの量の課題を与え、自己学習時間を取るよう試みた。

3. 介護現場での日本語運用力の育成

実習生には「利用者への声掛け」「職員への報告」「業務の申し送り」など、聞く、話す技能を中心としたコミュニケーション能力、介護場面における日本語の運用力の定着が求められる。そこで、第一に日本語の音声指導を行った。まず長音、促音、撥音に焦点を絞り、講習時に対面で音声指導を行った。特殊音の練習により、聴解・会話の双方に役立たせるためである。この練習には、SNS の動画・ボイス録音機能を用いた。実習生だけでなく教師の声も録音し、いつでも繰り返し音を再生できるようにした。

第二に介護場面に即した会話練習を行った。单元ごとに異なるレアリア（生教材）を活用し、例えば『洗顔と整髪』では鏡、櫛、タオル、『着脱』ではカーディガン、ズボンなどの衣服を用いた。『食事』では、食べ物の柔らかさ、食感（とろみ等）を表す語彙や和食惣菜の名称が表れたため、試食会を行い「とろとろ」「ぷるぷる」「ねばねば」等を体感してもらった。

第三に仕事の指示の聞き取り、報告の練習を行った。聞き取りは、利用者の名前、部屋の番号、時間、仕事などを、プリントに書き込む、というものである。報告は、講習の後期にこれまでの学習のまとめも兼ねて重点

1/21	自己紹介 札幌の交通機関
1/22	仕事 1 日目
1/23	発声練習
1/24	洗顔と整髪
1/28	着脱
1/29	車いす移動
1/30	食事、杖歩行
1/31	杖歩行 单元テスト①
2/4	食事
2/5	口腔ケア
2/6	環境整備
2/7	排泄
2/12	おむつ交換 单元テスト②
2/13	排泄

的に行った。方法としては、あらかじめ用意した場面（着脱、入浴、排泄等）、病状（認知症、左片麻痺、骨折、風邪等）、介助内容（タオルでの清拭、水分補給、入れ歯の洗浄等）を、実習生が選択し、ペアになってロールプレイを行うものである。練習の最後には介護士役となった実習生は、利用者の様子についてリーダーに報告するのだが、学習者のアドリブ力も光り、既習の語彙や文法で表現できる範囲で介護の日本語を運用する様子が見られた。

2/14	入浴、清拭
2/18	聞き取り、報告
2/19	聞き取り、報告
2/20	单元テスト③
2/21	聞き取り、報告
2/25	スピーチ指導

4. 最後の一実習生の活躍を祈って

入国後講習で接した実習生はみな日本語の学習に積極的で、日々内容の多い授業であったにもかかわらず、まじめかつ懸命に取り組んでくれた。3月から介護施設の現場入りを済ませてからは、介護の技能習得と試験のための日本語学習の両立が続いていく。実習生の今後の活躍を心から願うばかりである。



実習生・生活相談役の皆さんとお弁当を食べながら（手前左：守岡、右：田澤）

北 海 学 園 大 学
日本語教員養成課程報告書 第5号

編 集 北海学園大学日本語教員養成課程委員会（委員長 中川かず子）

発行日 2019年3月29日

発 行 北海学園大学日本語教員養成課程委員会

〒062-8605 札幌市豊平区旭町4丁目1番40号

TEL (011)841-1161 (内線)2621 (中川研究室)／FAX (011)824-7729

